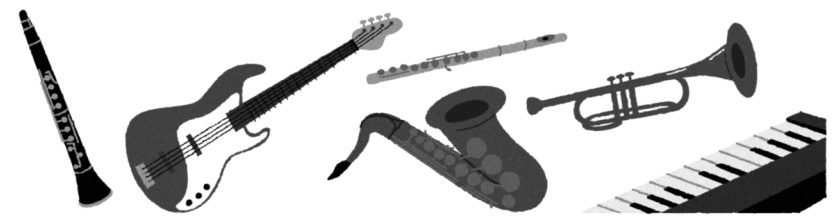


人々が共に抱く思いが重なって、石巻のまちに流れ出したメロディ

宮城県・石巻市「トリコロレ音楽祭」(2015年◆平成27年8月23日)



音楽は、人の心をつなぐ、最もふさわしい手段だ。その日、石巻は町中が音楽のステージになった。軽やかな旋律を聞きながら通りを歩くと、すぐに別のメロディが聞こえる。北上川が太平洋につながる川べりのまちである石巻の14カ所に設置されたステージで、バンドやミュージシャンが思い思いの演奏を響かせているのだ。音に合わせるように、まちの人たちの心も一体となっていた。

8月23日の日曜日に行われた、石巻の夏の風物詩、「トリコロレ音楽祭」は今年で12回目。2004年以来、「音楽で街中を明るく元気にすること」を目的に毎年続けてきたが、最大のピンチはあの大震災と津波に襲われた2011年だった。トリコロレ音楽祭実行委員長の今野雅彦さんが当時を回想する。

「音楽祭を開くことに反対意見もありました。でもその時思ったのは、我々は音楽にすごく助けられて生きていたということなんです。そしてまちの文化活動を震災のために失ってしまったて本当にいいのか、とも。だから反対を押し

切って開催したのですが、結果、みんなでひとつのものを作り上げることができただけでなく、この音楽祭がお互いの一番大変なときの情報交換の場にもなりました」
それから毎年開催されたトリコロレ音楽祭。今年は過去最多の149の個人や団体、総勢720名超がステージに立った。大阪や兵庫など、遠方からも駆けつけた参加者たちが、町中の公園やパーキングスペースを利用したステージで、フォークやロック、Jポップから、ウクレレやベリーダンスまで、思い思いの演奏と歌声を披露したのだ。

UR有志でバンドを結成

その149のバンドのなかのひと組に、被災地の復興支援に携わるUR都市機構の有志が結成した「UR Band」の姿もあった。トランプットやフルート、ベースやドラムなど、多彩な楽器で構成された10名のメンバーは全員URの職員。仙台や女川、石巻に勤務するために結成された。そのなかの最年少が、今年、新入社員として仙

岸部には何も無い状態の土地がある。私は、災害公営住宅を建てるだけでなく、コミュニティ形成のお手伝いもできる、と思いついてURに就職しました。これからは住民の方々のことを考えながら、仕事をしたいと思っています」
UR Bandが奏でた最初の曲は、東北を舞台にしたドラマ「あまちゃん」のテーマ。そしてビートルズの「A Hard Day's Night」「Hey Jude」など、誰もが知るナンバーが続く。クライマックスでは手拍子を打つ観客のひとりに高橋が打楽器のクラベスを渡し、演奏する側と聞く側の垣根が取り払



石巻市民と音楽を通じて一体となり盛り上がる

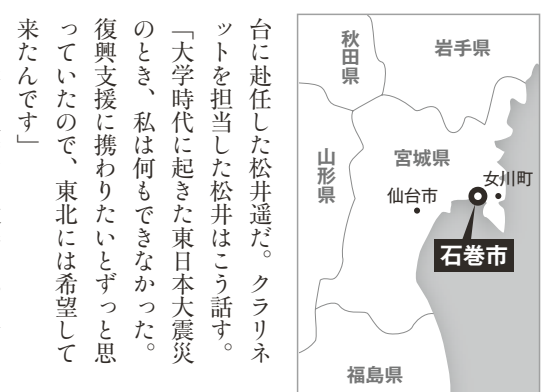
われる。その演奏を後ろの方で聞いている阿部登志子さんは、女川の離島、出島(いずしま)の家を津波で失い、石巻の今の家に引っ越してきて2年になる。阿部さんが言う。「楽しかったです。人がいっぱいいて、いろんなところで歌っていて面白いですね。もとい島の人と離ればなれになって、まだ完全には今のまちに馴染めていないのですが、こうやって盛り上がっているのを見るといいなって感じました」
音楽祭に参加した149グループが奏でるのは「希望」という名のメロディーでもあったのだ。

ものづくりと音楽に通じるもの

トリコロレ音楽祭には、隣町の女川町でURとタッグを組む女川町復興推進課参事の柳沼利明さんも訪れていた。柳沼さんは「復興支援の方々が、若い人たちが町を応援するために出演してくれているのは素晴らしいこと。こういう交流や絆が音楽の力でずっと続いていてほしいです」と話す。
UR Bandでチェロを担当したのは、その女川の復興支援事務

所で復興まちづくりを担当し、地権者や町との調整に携わる小池信子だ。
「3年前に仙台に赴任したときに、前からやりたいと思っていたチェロを始めたんです。そのあとで女川に異動して、いまではすっかり愛着を持つようになりました」
町の人たちから、家やお店が再建できて嬉しい、と言われるときが一番だと語る小池。その小池と同じ女川復興支援事務所です仕事を担当している曾根佳恵は、ピアノを担当した。
「まだ仮設住宅に住んでいる方もたくさんいらっしゃるので、一日でも早く高台の造成やかさ上げで住宅地の整備をしたい。それが私たちの使命だと思って仕事をしています」

そして、今回のUR Bandの呼びかけ人であり、メンバーをまとめあげたのが、住宅整備部で、災害公営住宅建設の設計を担当する高橋正樹。練習の日程を調整し、曲をアレンジし、パートを割り振るなどの活躍をした高橋は、今回の参加を振り返ってこう言う。「URの仕事でも私はディレクタ



台に赴任した松井はこう話す。「大学時代に起きた東日本大震災のとき、私は何もできなかった。復興支援に携わりたくいと思っていたので、東北には希望して来たんです」
中学高校時代、吹奏楽部に所属していた松井だったが、それ以来音楽からは遠ざかっていた。それでも、中高時代に奏でていたクラリネットは、手放すことができなかった。赴任先にも持ってきていた。今回、UR Bandのリーダーの高橋正樹に声をかけられ、そのクラリネットが思いがけず復活することになった。普段は土木の設計を担当する松井は、限られた時間の中で土日の練習に励んだ。
「震災から4年経って、確かに瓦礫は少なくなりましたが、まだ建物に津波の跡が残っているし、沿

1的な立場で、地元・行政の方々、様々な職種の人たちと調整しながら、仕事を進めています。それぞれのパートをまとめてひとつの完成品を作り出すところは、ものづくりも音楽も一緒です。人々の思いやいろんな意見を調整しながら、方向性を導きだしていく。それこそがまちづくりそのものなんだと実感しています」
URの力を仲立ちとして、まちの人たちが自立して安心できる住まいを作っていくことが一番の望みだと話す高橋。皆が共有しているその思いが重なって、流れ出したハーモニーこそ、新しく生まれる石巻の音楽なのだ。